

第40回よろなか塾　　2016年2月4日（木）

## 地域に愛される水族館を目指して

講師（株）道の駅やよい　番匠おさかな館
館長・学芸員　立川 淳也 氏

- プロフィール:**

1975年静岡県富士宮市生まれ

1994年東海大学工業高等学校機械科進学コース卒業

1998年東海大学海洋学部水産学科卒業【卒業論文】西表島網取湾におけるカンモンハタの放流に関する研究

1999年国土建設学院 測量科 卒業

2001年株式会社道の駅やよい入社

番匠おさかな館に配属

2009年番匠おさかな館館長に就任／・大分県希少野生動植物保護推進員・日本自然保護協会自然観察指導員

・佐伯自然環境調査研究会調査員(魚類他水生生物担当)



- 「番匠おさかな館」までの道のり:**

僕の実家は静岡県富士宮市でB-1グランプリで2回優勝した富士宮焼きそばが有名です。実家からの景色は、富士山が大きくとてもきれいに見えます。

小さい頃から生き物が大好きで、野原に行ってはバッタや蝶、トンボを捕まえて、小川に行って蛙を捕まえたり、しまいには蛇も捕まえたり・・・それを家に持って帰ったら、蛇が嫌いなお婆ちゃんに、普段と違ってそのときはすごい剣幕で怒られ、泣く泣く逃がした記憶があります。

高校2年の頃に熱帯魚を本格的に飼い始めて、もっといろいろな魚のことを知りたい、水族館で働きたいという夢を持つようになり、博物館就職に有利な学芸員課程があり魚のことを学べる東海大学海洋学部水産学科に進学しました。大学のクラブ活動では、水族応用生態研究会に入り、南伊豆に出かけ、素潜りで海に潜って魚を採って、それを下宿で飼ったり、学園祭では、食堂を区切って真っ暗にして水槽を並べてミニ水族館を作ったりするなどしていました。

春休みには沖縄県石垣島で1ヵ月半位、海岸の砂浜にテントを張ってキャンプ生活をしたことも。目の前は珊瑚礁、海に潜って熱帯魚を採ったり、釣りをしたり、時には大きなタコを捕まえて食べたりしました。

卒業研究は、沖縄県西表島に海洋研究所がありそこで10ヵ月滞在。研究所は船でないといけない陸の孤島で、周りはものすごいジャングル、大きなヤシガニや、ハブとかも普通にいるような環境でした。目の前の海はきれいなサンゴ礁で毎日のように海に潜っては、魚を捕まえたり、大自然を満喫しながらの卒業研究でした。

しかし、そんな充実した大学生活を過ごしているうちに、水族館で働こうという夢にちょっと変化が現れてしまったんです。「好きな事は仕事にせず、趣味で自由にやればいいじゃないか」という考えに変わってしまったんです。卒業研究が西表島にいたので、ろくに就職活動もしなかった訳ですが、親が司法書士と土地家屋調査士をしていて、父が「お前でも必死に勉強すれば土地家屋調

査士になれるんじゃないか、それには測量の技術が必要だから1年間測量の専門学校に行ったらどうだ」と言う助言を受けて測量の学校に1年行くことに。もう1年、学生をやれるという甘い気持ちもあったと思います。

専門学校卒業後は測量会社で働き、その後は別の土地家屋調査士の事務所で働きながら勉強させてもらってたんですが、その仕事になかなか興味が持てない自分がいて、この先やっつけけるのかと非常に悩み、結局諦める決断をしたのですが、親には申し訳ない気持ちがいっぱい親の前で涙を流しました。初めての挫折でした。

親に頼って生活するわけにもいかず、中距離トラックで配達のアルバイトをしながら、この先どうしようかと自分を見つめなおす日々でした。

そんな中、大学の後輩や友達と南伊豆の海に出かける機会があったのですが海に潜って魚を見ているうちに、「本当にやりたい事はこれなんじゃないか、やっぱり好きなことを仕事にしたい」と今更ながら強く思うようになったんです。

その頃24歳だったんですが、その気持ちを水族館に勤める親しい先輩に相談したところ「今からでも遅くはないよ、後悔しないように挑戦した方がいい」と励まされて、アルバイトをしながら休みの日は水族館で研修をさせてもらい、水族館で働けるならどの土地でも行こうとそういった気持ちで再び水族館を目指すことになったんです。そんな中、大分県南海部郡の弥生町という所に道の駅ができ、そこに小さいけど淡水魚水族館でき1人求人があると情報を仕入れ、面接試験を受けて合格し、現在に至っていますので、回り道をして水族館の道に入っています。

・**水族館(学芸員)の仕事について:**

水族館は博物館と同じ位置づけになるんですね。博物館には、次の3つの機能があります。

1.収集・保存、2.調査・研究、3.展示・教育、この3つを活用して運営して行くのが学芸員の役割です。

・**収集・保存:**

展示している番匠川の生きものは、ヤマメ・アマゴ、アユは養殖ものを買っていて、それ以外の魚は僕たちスタッフが川に行って胴長を履いて、タモ網で採集するんです。生きものによっては水中に潜ったり、夜間にライトを照らして採集します。その他、投網やもんどり(ワナ)で採集することもあります。これらの採集を行うため、県に特別採捕許可というのを申請して行っています。採集した生きものは飼育に用いたりするわけですが、初めて採れた魚とかは専用の水槽に移していろんな角度から撮影したり、ホルマリン液に浸けて標本にしたりします。こういった撮影データや標本はいつどこで誰が採ったかということを知るようにして管理を行っています。

・**調査・研究:**

番匠川流域で調査を行っているんですけど魚以外にも甲殻類、両生類、水生昆虫、水生貝類、水草など、水生生物全般を調査していて、これまでの調査で魚類や甲殻類であればどこにどんな種類がいるかは網羅しています。今は水生昆虫に力を入れたいと思っていますけど、それぞれの分野の知識をもっと広げていきたいですね。

・**番匠川水系の魚類相:**

番匠川水系で生息が確認されている魚種は…154種
純淡水魚（21種…エノハ、コイ目、ナマズ目）

両側回遊魚（12種…アユ、ハゼ類）

降河回遊魚（2種…ウナギ、オオウナギ）

遡河回遊魚（1種…シロウオ）

汽水性淡水魚(29種…ハゼ類:マハゼ、ウロハゼなど)
偶来性淡水魚(89種…ボラ、クロダイ、スズキなど)

・**番匠川水系で大分県では珍しい魚:**

チクゼンハゼ・クボハゼは、平成26年大分県で魚類では初めて指定希少野生動植物に指定され許可がないと採ることができません。水質汚濁や環境の変化に弱い魚ですが、番匠川河口では個体数が多く、自然環境がよい事が分かります。番匠川の特徴としては、南方種が多く見られることですが、テングヨウジは、大分県で番匠川以外ではまず見られない魚です。オオウナギも、たまに採れていて、本匠小半でガニ籠に全長130cm位のが採られて、おさかな館で3年位展示していました。結構パワーがありまして重しのブロックを押し上げて、脱走。翌朝、機械室で死んでたんです。今は80cmくらいのオオウナギがいます。アカメは、2月の市報の表紙を飾ったんですけど、今年の11月に番匠川の河口で釣れて寄付してもらいました。とても珍しくて幻の魚と言われているんですけど、ルアーをする人にとっては本当あこがれの魚です。名前の通り光を当てると目が赤く光ります。

・**展示(常設展):**

おさかな館自慢の屋外生態水槽、これは外にある水槽を建物の中から観察するのですが、自然環境を再現したいい雰囲気でご覧になれます。こういう大きい水槽も含めて、僕たち学芸員がその管理をまかされているんですが、たくさんのお客さんに来ていただくには、常設展示の基本コンセプトがしっかりしている必要があります。

解説パネルも僕たちの手作りで、撮影した魚の画像をパソコンで加工して使っています。こだわっている点は、子どもでも読めるように説明文に必ずふりがなをつけるようにすることです。また解説する魚が川の上流、中流、下流、河口、海のどの環境にくらしているか生息域メーターで分かるように工夫しています。これを見ればその魚が一生を淡水域でくらすのか、一度、海に降って川に戻ってくるのかなど、おおよその生活史が一目で分かるようになっていきます。

番匠川の魚以外にも世界の熱帯淡水魚も展示している他、手作りのクイズやパズルなど水族館としての面白さも追求しています。

・**展示(特別展):**

特別展は常設展と違って、僕らが毎回テーマを考えて行うのですが、およそ3ヶ月の特別展を年3回開催しています。特別展では長期の維持管理が難しい生きものや、新たな展示手法に挑戦するなど、学芸員の腕の見せ所です。その準備にはおよそ2ヵ月を要します。

これまで行った特別展を少し紹介しますと、魚食性の魚の展示では、水槽の魚がまだ子供が多かったので、成長した大人の原寸サイズのイラストを床に貼ったり、「夏の金魚展」では、金魚の系統樹に習って水槽を並べたり、「魚と大人と子供」では、子供と大人を対面させてラン

ダムに並べ、床にテープを貼ってアミダを作り、それを辿ると親子関係が分かるといった展示もしました。そして昨年の夏に行った「番匠川の川虫」では、川底の石裏にいる水生昆虫本来の姿を見せたいと思い、水槽を45度傾けて設置し、石の裏側が観察しやすいように工夫しています。これまで行った特別展の内容は、当館ホームページで2006年のものからご覧になれますよ。

・**教育活動:**

地域に愛される水族館になるためには教育活動が大事だと思い、自然体験活動に力を入れているのでその取り組みについて紹介します。

よく行うのが「水辺の観察会」で　川に行ってみんにタモ網を持たせて捕まえ方を教え、石の裏をはぐったりして生きものを捕まえます。捕まえた後は水槽の中に入れて、生きものを紹介していくんですが、ちょっとした水族館が出来上がります。　「魚釣り体験」では、竿と釣りの道具は用意しますが、エサは用意していません。エサは川の中で石をはぐって水生昆虫を自分たちで捕まえてもらいます。よく釣れるのはトビケラという虫なんですけど、魚たちが普段食べているエサで釣りをするわけです。釣った後は、みんなで内蔵やうろこを取って唐揚げ粉をまぶし油で揚げるのですが、子供たちは骨ごと喜んで食べてくれます。　4年生以上のプログラムでマスクとシュノーケルをつけて水中に潜って、エビタモという特殊な網を使って川底にいるハゼ、テナガエビ、モクズガニとかを捕まえる「水中生きもの採集」があるのですが、これは大人でも楽しめる内容です。水中を観察しているので活動中は意外に静かですが、次第に「とったぞー」と大きな雄叫びが上がり面白いです。もう上がりなさいと言ってもまだやるという具合です。　「川を流れて探検」では、事前に川の危険について教えた後、ライフジャケットを着て安全を確保した上で川を流れ、危険な場所など身を持って体験してもらいます。川は危険な場所もあるけど、上手につきあえば楽しい場所という事を勉強します。　また川に行けない学校などあれば、生きものや水槽を持参したり、パワーポイントを使って「出前授業」も行っていますよ。

・**これまで学んだこと、今後の目標:**

最近見ないトノサマガエルは、今や絶滅危惧種です。アマガエルと違って、手に吸盤がないので、コンクリートの水路に落ちるとはい上がることができず死んでしまうんです。最近は畦でできた自然豊かな水路が激減していて、こういった水路がないとトノサマガエルは生きていけません。コンクリートの水路は必要なときにしか水を流さない水路もあり水にくらす生きものにとって致命的です。

佐伯市は豊かな自然が残されている方かもしれませんが、自然は着実に減少していて、その失われ行く自然を目の当たりにしながらこれまでおさかな館は何もすることができませんでした。これからはおさかな館が先頭に立ってですね、皆様の協力を得て、自然を保全する活動を進める必要があると考えています。本当の意味で地域に愛される水族館になるためにはどうすればよいか。一生懸命に努めていきたいと思いますので、これからも皆さまのご協力のほどよろしく願ひいたします。